

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 3 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20530520

研究課題名（和文） 社会復帰を促進するネットワーク生成モデルの構築

研究課題名（英文） Construction of an Effective Social Support Network Improving Social Adaptation

研究代表者

大下由美（OSHITA YUMI）

県立広島大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：00382367

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、コミュニケーション・ネットワークの力動性の変化から、クライアントの社会復帰の促進を試みるネットワーク生成モデルを構築することであった。まず、不適応状態でのコミュニケーション・ネットワークを評定する、社会構成主義的な視点からの基礎理論が構成された。次に、評定論が整備され、それに基づく社会構成主義的家族療法の変容技法群が体系化された。さらに、Bales の相互作用過程分析に基づく介入過程の測定法の定式化が図られた。そしてこのモデルの有効性が、実践事例の分析を通して明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to construct a generative social support network model which could be used for clients who need to change the basic dynamics of their communication networks. First, a basic theoretical framework was constructed based on social constructionist social theory to assess a maladaptive communication network. Second, a framework for assessment was systematized, founded on this same theoretical framework, and intervention skills for family therapy influenced by social constructionism were integrated into this assessment framework. Third, a measurement method was developed based on Bales' interaction process analysis. The effectiveness of this clearly defined method for social work practice, grounded in social constructionist theory, was demonstrated through case analyses.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 21 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：保健・医療・介護福祉

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成17年度～平成19年度の萌芽研究の研究成果を基盤とし、そこで明らかになった課題に答えるための研究に位置づけられる。萌芽研究では、社会復帰支援のための評定、介入、効果測定法の体系化の研究が試みられた。その結果、3つの課題が明らかになった。一つは、クライアント自身による変容過程の生成についての理論化は進展したが、他者の側からの変容の動きと、クライアントの変容とを、どのようにネットワークさせていくのかという、トランズアクションな過程での生成的変容論の理論化が不十分な点であった。もう一つは、ネットワーク変容を生成する際の技法群の使用法の体系化が不十分な点であった。クライアントが問題を訴え、その訴えを変容する過程で用いる技法群の効果的使用法についての洗練化が求められた。さらに効果測定法の実施手順と変容過程との整合性、およびカテゴリー化の妥当性についての検証作業が必要な点であった。これらの課題の克服は、多問題の解決を求められる社会復帰支援モデルとして、本研究のネットワーク生成モデルを構築するためには、不可欠なことであると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会復帰の際に多数の課題を抱えるクライアントへのソーシャルワークモデルとしてのネットワーク生成モデルの構築を試みることである。具体的には、そのためネットワーク生成モデルの基礎理論として、ネットワークの生成論的定義の考察を深めること、実践理論として、基礎理論と統合的な変容論、変容技法について明らかにすること、そして、効果測定法の実施手順の定式化を図り、実践事例での検証作業を通して、ネットワーク生成モデルの有用性を考察することである。

3. 研究の方法

本研究は、理論的研究、実践的研究、効果測定研究に区分され、それぞれ以下のような方法を用いて遂行された。

(1) 基礎理論の研究手法

平成20年度は、理論的研究を中心に、『支援論の現在—保健福祉領域の視座から—』で体系化した枠組みを土台とし、社会構成主義的視点から、ネットワーク概念の生成論的構

成と、問題パターンの評定法、変容技法の使用手順の定式化、および効果測定法の定式化の研究を試みた。その概略は以下であった。

①生成論的ネットワークの定義

基礎理論におけるネットワークの生成論的定義については、既存のネットワーク療法における理論的枠組みを、社会構成主義的視点から吟味する。特に、萌芽研究において吟味されたネットワークの定義を、より洗練化させる。まず意味の重層体である一つのトランズアクションを要素とするネットワークを、「ネット」と「ワーク」に区分する。そのうち前者は、トランズアクション過程を基本的構成要素とし、重層的に構成される構造と力動性を見出すことができる構成体と定義される。後者は、重層的に構成された構造と力動性のネットを、問題解決を志向するネットに変容すること、つまりワークとして定義する。この「ネット」と「ワーク」の定義に基づく、変容論の体系化を試みる。つまり、クライアントの訴えは、客観的な事実を伝えるメッセージとしてではなく、他者とのトランズアクション過程において、出来事群のネットワークを生成することで、生じる特有の現実構成法として社会構成主義的に捉えられる。この理論の枠組みは、問題の増幅とその変化とを説明する力を有しており、評定の理論枠の役割を担う。それは、クライアントの苦痛の訴えという現実構成を、トランズアクションなソーシャル・サポート群のネットワークとして定義されるシステムレベル、システムを構成するソーシャル・サポートのレベルという、マクロからミクロまでのレベルに区分し、各レベルより、その生成力学を分析し、変容させる戦略である。

②問題パターンと変容技法の定式化

問題パターンと変容技法の定式化は、以下の方法で吟味される。クライアントの抽象的な訴えは、具体的なひとつの場面での行為と行為の意味構成という2つの要素を基本的要素とするシーケンスとして記述しなおされる。その記述されたシーケンスの特有の構造と力動性が評定される。この評定の理論的枠組みに基づく変容は、クライアントが、他者とのトランズアクション過程において、自らの行為選択や他者の行為への意味構成、そしてそれらの構成体である出来事を生成させる規則を変えることとして定義される。この評定された具体的なひとつの場面の特有の構造と力動性の変容のために、一連の変容技法が使用される。この限定されたシーケ

ンスの構造と力動性の特性と、各技法群の効果的使用法について吟味し、定式化が図られる。

③効果測定定の定式化

さらに、そこでのトランズアクション的な変容過程についての効果的な技法が体系化される。これらの枠組みに基づいて、事例への介入が行われ、そこでの効果測定法の実施手順の定式化が試みられる。

(2) 実践研究の方法

平成 21 年度、22 年度は、平成 20 年度で体系化した臨床の基礎理論に依拠し、実践研究を試みた。実践研究は、広島大学病院をフィールドとし、広島大学の疫学研究倫理審査委員会の審査を経たのち、研究への参加協力の同意が得られたクライアントに対し、ネットワーク生成モデルのフレームに基づく支援を試みた。面接過程は、全て逐語形式で記録され、その支援過程のデータの分析から、以下の①～④の変容手順の定式化が吟味された。

① 訴えのトラッキング

クライアントの訴えを具体的な問題場面でのトランズアクションのシーケンス、つまりその要素であるメッセージ伝達行為とその意味づけの連鎖としてクライアントに記述させ、再構成してもらう。

② 評定と技法選択

①のメッセージ伝達行為と意味づけの生成力学が評定され、その力学の変容に向けて SFBT の一連の技法、循環的質問法、逆説的介入技法等の使用による変容力が吟味される。

③ 変容過程

①で再構成された問題場面の構成要素（メッセージ伝達行為および意味づけ）へのリフレクションが、②で吟味された結果に基づき試みられる。

④ネットワーク・システム全体への変容力学の生成の評定

そこで浮上したシーケンスの要素の差異が、生活場面で実践される。実践場面のトラッキングにより、変容力学が評定される。さらにこのひとつのシーケンスの変容力学を他のトランズアクション過程のシーケンスの変容に波及させる技法の効果的使用法が吟味される。そしてサブシステム内の変容力学及びそれらサブシステム相互間の変容力学が評定される。

(3) 効果測定研究の方法

平成 20 年度から平成 23 年度を通して、効果測定法においては、上述のように効果測定法の定式化が試みられた。とくに、クライアントの訴えを、シーケンスの要素で再構成してもらう際、記述されたデータのランクの区分、収集されたローデータを Bales の相互作用カテゴリーに基づいてカテゴリー化する際の妥当性についてなどの効果測定法実

施上不可欠な課題について、実践事例の分析を通して考察し、効果測定実施手順の定式化を図った。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

主要な研究の成果は、以下の 5 点に要約される。

まず 1 点目は、「社会」を対人間のコミュニケーション・ネットワークの構造と過程から分析する生成論的視座を提示したことである。この視座に基づき、「社会復帰」を、対人間のコミュニケーション・ネットワーク内での新たなトランズアクションとその規則の生成として捉えた。このコミュニケーション・ネットワークは、マイクロ、メゾ、マクロレベルより、重層的に定義された。マイクロレベルのシステムは、2 者間のコミュニケーション過程の主体たちの行為選択と意味構成の力学によって生成するシステムである。あるマイクロレベルのシステムの力学は、他のマイクロレベルのシステムの力学と相乗的に作用し、各々のシステム間では、生成力学は安定化し、構造化される。つまり、メゾレベルのシステムが生成する。さらに複数のシステム間でトランズアクションが生成することで、マクロレベルのネットワーク・システムが構造化される。つまり、「社会復帰」の生成的定義を提示したことで、重層的なシステムの循環力学の中で生成されるというネットワークの生成論の理論枠が提示されたと考える。

2 点目は、この理論枠を提示したことで、以下のネットワーク変容論が提示可能となったことである。マクロレベルで評定されるネットワークの機能不全、つまりクライアントの訴えを生成するネットワークの力学（社会復帰が困難な事態）は、マイクロレベルで生成される悪循環の規則群の変容によって修正される。このマイクロレベルで生成される悪循環の規則群は、シーケンスの出来事の要素群（意味構成および行為選択）の差異化あるいは、要素群全体の差異化から、変容されることを示した。

3 点目は、上記の変容論が導き出されたことで、「技法選択の体系化」、「変容手順の定式化」が示されたことである。上記で論じたように、マイクロレベルの要素群のネットワークは、その出来事定義の変容または、一つの要素の差異化により、変容が可能である。この変容を可能にする、ネットワーク変容技法の体系化が試みられた。ネットワークのマイクロレベルの要素群の変容技法としては、循環的質問法を中心に、マイクロレベルの出来事全体を変化させる技法としては、解決志向の諸技法およびパラドキシカル処方技法を中

心に、それらの技法群の体系化が図られた。その技法群の体系化に基づいて、実践モデルの類型化が試みられた。そのモデルは、Circular Questions Model (循環的質問法モデル)、Solution Focused Skills Model (解決志向の技法モデル)、Positive Reframing Model 1 (肯定的リフレーミングモデル1)、Positive Reframing Model 2 (肯定的リフレーミングモデル2)、Paradoxical Model (逆説モデル)、という5つの実践モデルとして類型化された。

4点目は、効果測定法の体系化およびプログラム化が図られたことである。効果測定法の体系化については、変容場面のシーケンスの要素を、Bales, Rの相互作用過程分析のカテゴリーを用いてカテゴリー化し、カテゴリー化されたデータを3次元にグラフ化することで、その力動性の変容を測定する測定の枠組みが体系化された。この効果測定法は、簡易プログラムソフトMMIE (Measurement Method of Intervention Effectivenessの略)としてプログラム化された。このプログラムソフトを使用し、効果測定法の検証作業が実施可能となった。このプログラムソフトを用い、事例の評定を試み、ネットワークの生成力学の変容の測定力が考察された。その結果を踏まえ、プログラムソフトの改定を行い、シーケンスの要素群の変容力学の実証的効果測定法の簡易化を図った。

5点目は、これらの変容理論、技法、そして効果測定法の有用性が、具体的事例への介入を通して検証されたことである。有用性が検証された事例の一つは、慢性疼痛のため、社会復帰が困難であったケースであった。クライアントは、「痛み」を中心に、対処不能の世界を語った。クライアントの特有の世界を、特定の他者との2者間のコミュニケーションの構成要素(意味構成と行為選択)のネットワークとして、クライアントに記述させた。そのネットワークの構成要素のうち、一つの要素を取り上げ、その差異化のために、循環的質問法を中心的に用いた。差異化された要素は、再び2者間のコミュニケーションのネットワーク・システム内で実践され、システムの変容を内部生成的に引き起こす。このミクロレベルの差異化作業を、他の2者間のコミュニケーション・ネットワークへと波及させ、クライアントの不適應的「社会」としての現実構成規則を変容した。その結果、クライアントは、社会復帰(現職への復帰)を実現した。

(2) 得られた成果の国内外の位置づけとインパクト

本研究の成果は、国内外での学会発表および欧文での著作(5. おもな発表論文等の[図書]の①の文献)の出版と言う形式で発表さ

れた。学会発表においては、システムの変容力学の測定を中心に発表したところ、独創性の高い研究として評価を受けた。国内においても、測定論については一定の集団に着目された。また著作においては、国外の反応として、その独創性と国内外のソーシャルワーク実践への影響力について、肯定的評価が得られた。

(3) 今後の展望

本研究が遂行された結果、今後も、これまでの基礎理論、臨床的、技術的理論の体系の有効性を、事例研究の方法で検証する作業と、その結果に基づいて、本研究でのネットワーク生成モデルの理論枠の修正、洗練化を図らなければならないことが明らかとなった。具体的には、以下の2点に課題は絞られる。

①臨床実践研究法を洗練化すること

まず、各技法群の定義を明確にすることが求められる。そして変容過程を、問題場面の記述過程とその場面をリフレクションする過程に細分化し、各過程で使用する技法群の体系化と、その使用手順の洗練化を図ることが課題とされる。そのためには、事例数の増大が不可欠である。

事例数の増大に当たっては、ネットワーク生成モデルに基づくネットワーク療法の実施範囲を、医療領域から、保健、介護の領域へと拡大することが必要である。これらの領域拡大のためには、研究協力者の養成も欠かせないとする。そのためにも、変容技法の使用法および手順の一般化を目指さなければならない。

②効果測定法の洗練化を試みること

本モデルの有用性の検証作業においては、測定の要素を収集するトラッキング技法の使用法、およびその技法を用いて収集した、問題場面および変容場面のローデータ(シーケンスの要素群)の厳密なカテゴリー化の方法を明確化すること、とりわけトラッキングデータの重層的分析とそのカテゴリー化が依然として課題として残されている。この課題の解決は、これまでの検証事例数では不十分であり、今後ネットワーク生成モデルを提供した事例数を増大させ、上記の一連の測定手順の洗練化を図ることが必要である。

またネットワーク生成モデルの適用範囲を拡大して行われた実践事例の効果測定を通して、ネットワーク生成モデルの理論的枠組みの再整備を継続していくことが不可欠と考える。

上記①と②の課題にこたえる中で、ネットワーク生成モデルの体系の構築が実現されなければならない。またこれらの研究成果は、出版の形で国内外に公開していく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

Yumi Oshita, Clinical Social Work Practice with HIV/AIDS Patients, The Journal of AIDS Research, 査読有、第12巻2号、2010、119-123、

[学会発表] (計4件)

① Yumi Oshita, Kiyoshi Kamo, Social Work as a Practice of Reconstructing Meaningful Life Worlds, 21st Asia-Pacific Social Work Conference (Tokyo), 2011

② Yumi Oshita, Clinical Social Work Practice with HIV/AIDS Patient, X VIII International AIDS Conference (Vienna), 2010

③ 大下由美, 加茂陽, 問題の評定法と介入・測定法、日本家族心理学会第26回大会、2009年

④ 大下由美, 加茂陽, 家族療法における治療的変容過程の数量化、日本家族心理学会第25回大会、2008年

[図書] (計2件)

① Yumi Oshita, Kiyoshi Kamo, iUniverse, Reconstructing Meaningful Life Worlds: A New Approach to Social Work Practice, 2011、179

② 大下由美, 世界思想社、サポート・ネットワークの臨床論、2010、172

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大下 由美 (OSHITA YUMI)

県立広島大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：00382367

(2) 研究分担者

加茂 陽 (KAMO KIYOSHI)

県立広島大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：30099676